

あとから来る者のために
坂村 真良

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦勞をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとが続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
なにかをしてゆくののだ

U-net通信

発行:認定NPO法人 地球環境共生ネットワーク 〒105-0014 東京都港区芝2丁目6番3号三宅ビル4F TEL:03-5427-2348 FAX:03-5427-5890 http://www.unet.or.jp 編集人:U-net広報委員会/発行人:比嘉照夫

東日本大震災からの復興 福島県を放射能汚染対策地域から有機農業の里へ

取材/伊藤

逆境と対峙した時、人は何をなすべきか。その結果を考量し更に何をすべきかを考えるのは、我々が通常行う行動様式の基本である。2011年3月11日に起きた東日本大震災以降、福島県が辿った足跡はその行動様式の典型である。将来を見通すやり方は過去から何通りも行われてきたが、EMが達成した放射能汚染の克服が、将来この地を有機農業の里へと導く帰納的含意をもっていたのだ。今号では福島県内で、EMによる放射能汚染対策からEMによる有機農業へと軸足を移す3人の方をご紹介します。



▲写真1. 全国ブランドの「岩瀬きゅうり」と石井孝幸さん

EM栽培で守るきゅうりの全国ブランド。

須賀川市 石井農園

きゅうりの生産量日本一を誇る福島県須賀川市にある石井農園を訪ねた。2005年の須賀川市編入前は岩瀬村であったこの地で生産されるきゅうりは「岩瀬きゅうり」と呼ばれ、深い緑色をした柔らかいきゅうりとして全国ブランドになっている。現在、1,500本余りの岩瀬きゅうりをEMで栽培する福島県世話人の石井孝幸さんにお話を伺った(写真1)。

石井さんは1988年から埼玉県戸田市で建築業に携っていたが、1993年に知人から比嘉照夫博士の著書

「地球を救う大変革」を紹介され、読み終わった後、世界が一変した。

読後1年目は未知のEMについて猛勉強し、2年目はEMに反対する人たちの意見を検証した。3年目は更にEMの研究を進めるため、「EMネット埼京」にコンタクトを取り、EMの基礎講習をみっちり受講した。

その後、農業の基礎を覚えるために茨城県の農業法人に就職した。400町歩の畑で白菜・キャベツ・レタス・ナスの減農薬栽培に1年半携り、農業技術を習得した。また、将来、自宅のある須賀川市に戻り、EMによる農業を実践するため、自宅では良質のEM活性液作りに没頭した。

2001年に就農のため須賀川市に戻り、地元の名産品「岩瀬きゅうり」を栽培。JAの特別栽培部会に所属し、そこを通して大手スーパーマーケットで販売された。また、2008年に知人を通して東京を拠点とする高級スーパーマーケットチェーン紀ノ国屋に、EMオーガのブランドとしてきゅうりを卸すことができ、ビジネスが軌道に乗り始めた。しかし、ビジネスを更に拡大させようと考えていた矢先に原発事故が起き、すべてがストップした。

原発事故は起きたものの、1993年以来EMを研究していたため、ベラルーシの研究報告でEMを施用すれば農作物が放射能を吸収しないことを知っていた。案の定、石井さんのきゅうりからは、放射能の検出はなかった。しかし、消費者のために無農薬・無化学肥料で栽培した農作物が、福島県産というだけで危険物扱いされたことに残念な思いがした。そのような環境でも、石井さんはきゅうりの栽培を続けた。一般的には難しいといわれるきゅうりの無農薬栽培を実現し、大変美味しいと周囲から評価を得たことから需要も高まり、現在は売上も順調に回復した。

石井さんの住む地区は旧岩瀬村になり、日本で最初にきゅうりの栽培技術が確立されたところだ。昭和30年代からきゅうりの栽培に力を入れており、技術を積み重ねてきた。石井さんはその岩瀬きゅうり栽培指針(写真2)にEM技術を取り入れ、独自の栽培方法を確立した。現在の石井さんのきゅうりの栽培方法を見てみよう。



▲写真2. ブランドきゅうり栽培のバイブル「岩瀬きゅうり栽培指針」

■石井さんの岩瀬きゅうり栽培方法

- ① 播種箱にもみ殻くん炭を5cmの高さに敷く。
- ② 播種箱全体を30倍のEM活性液に浸す(写真3)。
- ③ 燻炭の上に土を1cmかけ、左右2cm、上下8cmの間隔で、予めEM培養液に浸しておいたきゅうりの種を埋める。EM活性液に浸すのはいい微生物を種に付けるためである。
- ④ きゅうりが発芽し本葉が約1cm大になったらカボチャに接木する。台木のカボチャの茎を斜めに切り、そこにきゅうりを切って差し込む(写真4)。台木にカボチャを使うのは、きゅうりと同じウリ科で根張りが良くなり、生育に必要な栄養分を吸ってきゅうりがよく育つようになるためである。散水時には、EM活性液の100倍希釈液を使用する。
- ⑤ 接木したきゅうりの本葉が3枚半になったら、苗をEM活性液の30倍希釈液に浸漬し、畑に定植する(写真5)。また、定植穴にはEM活性液の30倍希釈液をあらかじめ注入しておく。
- ⑥ 定植後約1か月で収穫が始まる。



▲写真3. 播種箱全体を30倍のEM活性液に浸す。



▲写真4. カボチャの台木にきゅうりを接木する。



▲写真5. 接木したきゅうりの本葉が3枚半になったら畑に定植する。

きゅうりは病気や害虫にやられやすい植物なのでコンスタントに収穫をあげるのが難しい。石井さんはEM技術を駆使し、常にたくさんのきゅうりの収穫を上げることに成功した。

石井さんは地元の小学校の総合学習の授業を17年間継続して担当している。3年生には、EMを活用したきゅうり、なす、トマトなどの作物栽培を、4年生にはEM基礎講座、EM活性液・ボカシ・EM団子作り、プール清掃、川の水質浄化などを教えている(写真6)。実体験を伴うこの授業には、理科、社会、道徳などの人間が社会生活を営むための基本も盛り込まれている。EMを活用した授業により子供たちの表現力や主体性に向上が認められたことから、学校側はEM環境学習を年間カリキュラムの中に組み込むことを決めた。石井さんはEMを通して児童が食べ物や環境問題に興味を持ち、自然との共生や社会に貢献することを考える人になってもらいたいと願っている。



▲写真6. 小学校の授業でEM活性液作りを教える石井さん

震災がもたらしたEMコミュニケーション

福島市 福島EMクラブ



▲福島EMクラブ代表の佐藤和幸さん(左)とEM研究機構の奥本秀一さん

福島EMクラブ代表の佐藤和幸さんを訪ねた。佐藤さんは元生協職員で、在職中はお惣菜を担当し、常日頃から有機栽培の野菜を使って美味しいお惣菜を作りたいと考えていた。その頃、生協の同僚からEMを教えられて興味を持ち、彼女が開催していた勉強会へ1年ほど通ってEM技術を基礎から学んだ。

生協を定年退職後、本格的に就農するために、当時、福島市が開校した2年制の農のマスターズ大学に入学し農業を正式に勉強した。1年目は講義と実習を行って農業の基礎を学び、2年目は実際に農家に入って種まきから収穫までの一連の作業を習得した。そのとき佐藤さんを受け入れてくれた農家が有機栽培で米、カボチャ、ナス、玉葱などを生産していた。

マスターズ大学修了後、20人の仲間と6反ほどの荒地を借り、自分たちで開墾し、色々な野菜を栽培した。この時、勉強会で習得していたEM活性液やEMボカシ・EM堆肥を駆使して栽培を試みた。その結果、たくさんの野菜ができて、EMの素晴らしさを実感した。大量に収穫できたため、かつての職場である生協の産直コーナーで売ってみたところ、たくさんのお客様がEM野菜は美味しいと言って買ってくれるようになった。

その頃、市から学校給食用のジャガイモ提供の打診があり、これを受けてジャガイモ栽培にチャレンジ。EM栽培のジャガイモもたくさんでき、出荷しても出荷してもまだ余った。それで近くの幼稚園にジャガイモ掘り体験会を提案したところ、100人の園児がジャガイモ掘りを体験する環境学習に採用された。EM栽培の野菜作りが軌道に乗り始めた矢先に震災が起こった。

震災直後は福島市内の東側は放射線量が高く、農協の指導により農地に入ることが制限された。この時、山形県のEM関係者の方達から大量のEMボカシを頂いたため、農地に施用することができた。また、放射能汚染対策として、EM研究機構の西沢さんと奥本さんにもEM活性液の散布に協力頂いた。その年の秋、お礼もかねて、山形県理事の五十嵐諒さんと20人の仲間たち、地元10名の有志とで、畑で収穫した野菜等を調理し芋煮会を行い、交流を深めた。

EMのお陰で、放射能不検出の野菜が震災前と同じように収穫できた。しかし、せっかく野菜を作っても食

べてくれる人がいないという理由で、一緒にやってきたメンバーの多くが辞めていった。震災後は福島で出来た農産物は世の中の誰もが敬遠した。

野菜作りは楽しいことなので一人になってもやり続けたいと佐藤さんは思った。畑の農作物を市が放射能測定したところ、まったく検出がなかったので知人に配った。食べた人みんなが美味しいと言ってくれた。そして、野菜を食べた人の中から一緒にEM栽培をやりたいと言う人がでてきた。

震災後、野菜作りには土作りが大切だということを実感した。美味しいものをつくるには有機栽培は必然だと思っている。今ではここ「わくわくEM農園」で栽培する野菜は、キュウリ、春菊、ズッキーニ、葱、カボチャ、枝豆、キャベツ、ニンジン、レタス、トウモロコシ、サツマイモ、インゲン、ゴボウ、アスパラガス、スイカなど実に多彩だ(写真1)。これらの野菜には水代わりにEM活性液を灌水する。その結果、今は美味しい野菜がコンスタントに収穫できるようになった。そして、今年は長い間中断していた幼稚園児によるジャガイモ掘り体験会も再開した(写真2)。

佐藤さんは2016年の環境フォーラムで開催した「EMマルシェ」に出店し、福島県内のEM農家と知り合うことができた。その仲間たちと「佐倉ファーマーズ」というグループに参加し、収穫したEM野菜や果物を販売するため、JR福島駅東口広場、コラッセふくしま、須賀川市、東京青山のファーマーズマーケット等でマルシェを開催している(写真3)。佐倉ファーマーズではメンバー

全員で毎月1回ミーティングをおこない、仕入れや販売などの戦略会議を開いている。その甲斐あって最近は売れ過ぎてすぐ品物がなくなることも度々である。野菜を食べた人みんなの笑顔が見たくて、佐藤さんは県内のEM栽培農家からの仕入れにも力を入れている。

佐藤さんの夢は県北にある霊山(りょうぜん)という地域に仲間と共にユートピアを作ることだ。ここは古くは僧侶の修行の地であり、南北朝時代には国府もあった由緒ある土地だ。しかし、近年は高齢化が進み過疎地帯になっている。佐藤さんはこの地でEMによる有機農業を促進し、地域に点在する古民家を改修し、県内外からたくさんの移住者を呼びたいと考えている。夢の実現のため、NPOりょうぜん里山がっこうが主催した「幸せな地域づくりのリーダー養成講座」を受講し、具体的な絵を描き始めている。かつては震災の風評被害で苦しんだが、今、佐藤さんの夢は有機農業で大きく広がりはじめた。



▲写真1. 佐藤さんが主宰する「わくわくEM農園」



▲写真2. 幼稚園児のジャガイモ掘りも今年から再開



▲写真3. 東京青山のファーマーズマーケットに出店中の佐藤さん(右)

EMで自然破壊から福島を守りたい

南相馬市 馬場EM研究会

南相馬市で馬場EM研究会を主宰する羽根田薫さんを訪ねた。会社勤めだった羽根田さんは週末を利用して家業の農業を手伝った。有機農業は羽根田さんの父が2001年ごろから始めていた。羽根田さんは有機農業でおいしいお米を作りたいと考えていたが、週末の限られた時間での就農だったため難しいと感じていた。その後、2004年に定年退職し、本格的に有機農業に専念することになった。有機農業は除草剤や化学肥料を使わないため、当時は周囲の農家から奇異の目で見られた。有機栽培のお米の精度を高めたいと考えていた矢先、東日本大震災が起こった。

羽根田さんの住む南相馬市は福島第一原発からわずか20.3 kmしか離れていないため、原発事故直後は市により1年間の農作物の作付けが制限された。何とか農地の放射能を低減させたいと考えていた時、地域の総会でEMの説明会が開催された。説明会終了後、近隣農家の10人ほどがEMを使ってみたいと手を上げ、その仲間たちと共に地区の公会堂で百倍利器1台と1トンタンク1台で活性液作りを開始した。半年ほど自宅に活性液を撒いてみたところ、地表面の放射線量が半減した。良好な結果がでたため農地にもEM散布を試みた。その結果、EMを散布していない田圃で収穫された玄米には放射性セシウムが80Bq/kg含まれていたのに対して、EM散布した田圃の玄米では20Bq/kgだった。実に1/4に低減していた。その後もEMを施用すると土壌改善効果が素晴らしく、稲の生育面でも良好な実績を得ることができた。それ以来、現在も継続してEMを活用し、2ヘクタールの圃場で有機JAS認定コシヒカリを栽培し出荷している。

震災後に羽根田さんが一番苦労したのが、作ったお米の販路を見つけることだった。震災後にわざわざ福島のお米を買う人はほとんどいなくなった。たとえ販売できても一時的なものであって、リピーターは皆無だった。JAも販路を紹介することはなかった。羽根田さんの有機米は作るより売ることが問題だった。

そこに一筋の光を投じたのが、U-ネット福島県理事の武藤麻央さんだった。武藤さんは羽根田さんの有機米を採用した「ムトウ印の有機米焼きおにぎり」を製造し、南相馬の道の駅や常磐道のサービスエリアなどで販売を開始した。このおにぎりは美味しいと瞬く間に評判になり、おにぎりを買うためにわざわざサービスエリアに立ち寄るお客さんもでてきた。また、羽根田さんの有機米は、近隣の旅館でも利用されることになった。

羽根田さんに有機農業に取り組んでいる理由はなにかを質問してみたらこんな回答が返ってきた。「田圃にいる蛙や赤とんぼを見ていると自然破壊は絶対にダメだと思う。最近はホタルもいなくなった。過去には薬剤の空中散布により、人の健康に影響を与える心配があった。周囲のこのような状況を見て、自分は農薬や化学肥料を使わない有機農業をこれからもやり続けようと思っている。」

ここにご紹介した3人の方は、放射能汚染という逆境から力強く復興してきた方たちです。10月5日(土)に福島県郡山市で開催される「善循環の輪の集いin福島・第9回東日本大震災復興支援環境フォーラム」で3人の方は事例発表されます。また、同イベントでは「世界初、インド・シッキム州が100%有機農業化を達成！」の特別講演もごございます。皆様のご来場をお待ちしております。



▲有機米の米袋を持つ羽根田薫さん



▲ムトウ印の有機米おにぎり



EMの“自然のちから”が人々の営みを後押し ～EMによる新たな農業経営やEM環境浄化に弾み～

取材／杉山

四国地方は高知県、愛媛県、徳島県、香川県の4県で構成され、毎年、各県が持ち回りでEMによる「善循環の輪」を開催している。今年は徳島県が主催するに当たり、美馬市、勝浦町と鳴門市で活動するEM仲間の皆さんを芝幸一郎氏（U-ネット徳島県世話人）と共に事前取材をさせていただいた。実に興味深い実利的な活動の詳細は、10月26日（土）開催の「善循環の輪 in とくしま」で発表されます。

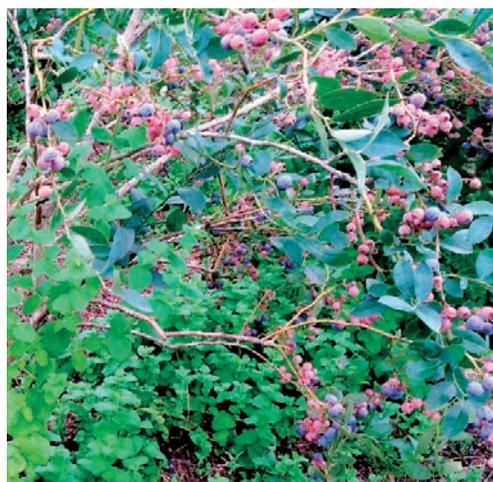
自然と調和したブルーベリー農園「ベリーベリーファームわかまち」

徳島県美馬市

ベリーベリーファームわかまちを経営する吉田文昭氏の経営ポリシーは有機JAS認定取得で安全・安心な果樹生産にある。それには自然栽培にこだわり、EM導入と杉皮チップ大量敷き込み、有機JAS認定取得と維持管理・向上活動、コンパニオンプランツであるハーブとの共生による、徹底したオーガニック環境下での栽培が最も重要と吉田氏は力説する。

栽培中のブルーベリーは10か所に40種、約600本にもなる。今は黒紫色に熟した収穫前のブルーベリーが目玉になる。これは鳥にも同様と思われるが、要所に鳥害虫防除用EM結界ボトルが設置され、侵入される事はない程に効果を上げている。

EMを採用してから、実持ちが良い、太いシュート（徒長枝）が発芽する等、EM結界ボトル効果と相まって収穫アップを実感しているが、もっともっと工夫しなくてはならないと気を引き締めている。



▲吉田文昭氏と奥様



▲表土にびっしりと敷設された杉皮チップとハーブ



▲EM結界ボトル効果に自信

自然農法で農業経営に活路を見出し、地域社会の活性化に貢献

徳島県勝浦町

徳島県勝浦町で農業法人 株式会社トラストを立上げ、子供たちの未来を見据えた壮大な事業展開を図っているのは、同社の岡田智明社長と片山政紀農場長。

勝浦町の人口は約5200人。10年前に比べ約800人も減り、65才以上人口は43%にもなる典型的な過疎の町。農業が基幹産業ながら、少子化や高齢化が行く手を阻む構造に、町の貴重な資産である農地に息を吹き掛け、無農薬・無肥料栽培による高付加価値野菜の事業化（6次産業化も視野）に挑む。

耕作放棄地の増加には心を痛めるが、「可能な限り当社で引継ぎ、地域環境を守る」活動を強め、地域雇用を含めた農業ビジネスを軌道に乗せたいと話す。



▲収穫間近のエダマメハウスの岡田智明社長（左）と片山政紀農場長（右）

将来を担うのは子供たち。野菜嫌いな子ども達が多いが、自然農法による本当の野菜の味を知って、好きになって欲しいし、自然溢れる環境からの安全・安心で健康的な自然の恵みのありがたさを教えていきたい、とも。

同社の自然農法の基本は、EMもみ殻堆肥とEM活性液であり、一切の化学肥料を使わないで植物の「命」を活かすところにある。7～8月を除く周年栽培は主にリーフレタスやサニーレタス、エダマメ、クレソンで、ビニールハウス(39棟)で栽培。臨時就労者を含め10人で対応する為に、徹底した機械化を進める。幸い農業ビジネスは法人化に伴い大口顧客からの商談が多くなっている。ビジネスの基本は品質や価格、納期管理にあり、これを農業分野に応用する試みは始まったばかりである。

鳴門市環境衛生組合連合会の河川浄化活動

徳島県鳴門市

鳴門の渦潮で有名な鳴門市では、昔から塩田(入浜式)が盛んに行われていたが、安い精製塩の流通で塩田は埋め立てられ、住宅地として変貌した歴史がある。結果、海水を引く為の水路は生活雑排水で溢れ、瞬間にヘドロが堆積し異臭の漂う水系になり、それは程度の差こそあれ現在も続いている。

鳴門市環境衛生組合連合会(藤村松男会長)は、この窮状を解決する為に市民に呼び掛け、EMによる浄化活動を続けている。公民館(14館)の8か所にEM培養装置(200L)や培養タンク(1トン)を設置し、EM活性液大量培養環境を整える一方、出来上がったEM活性液を周辺家庭の雑排水に使ってもらえるよう定期無償配布したり、汚染した七枚水尾川等に大量投入する活動を続けた結果、僅かながら改善の兆しが見えてきた。

しかし、徳島県の下水道普及は全国でも最下位で、鳴門市の人口対比でも僅か10%の現状、河川汚染の主要因である生活雑排水の河川流入を止める有効な手立てを講じない限り、際立った成果は期待できないのも事実。

それでも活動を続けると言う藤村氏に次に紹介された場所、それは鳴門市から車で西に20分の大麻地区で、周囲はレンコン畑が見渡す限り広がる田園地帯。驚く事に、この場所には3年前より国の特別天然記念物・コウノトリが営巣活動をするようになった。コウノトリに限らず渡り鳥が営巣活動する条件は、周囲に自然が残り、豊富な餌場がある事で、鳴門市は生物多様性の宝庫とも言える。

藤村氏と元行政マンの中谷 宏氏の活動は、都市部の人口密集地に絞っている。幸いな事に、次々に繋げる河川浄化活動に立ち上がる住民が増加している事に加え、地元企業の支援、行政の下水道政策が近い将来、子どもたちの歓声がこだまする川辺の実現が、夢ではなく現実のものとなると確信した。



▲七枚水尾川浄化活動する中谷 宏氏(右)、藤村松男氏(中央)、芝 洋征氏(芝商事会長)(左)



▲公民館のEM培養施設



▲大麻地区のコウノトリ営巣地



夫婦で実践する金沢のスローライフ 私たちのEM健康生活

取材／伊藤

「人は病気になった後にお金を使うより、病気にならない生活を送るためにお金を使うべき。すなわち、医療費削減策を考えるには病気にならない生活を送ることを考える。それを可能にするのがEMである。EM健康生活を実践することで年間42兆円を超える医療費は下げることが可能だ。」開口一番、U-ネット石川県世話人の高山繁樹さんの口から独自の哲学が飛び出した。



▲高山さん夫妻

高山さんは元々自然志向が強く、会社員の現役時代から、退職したら自然の中に住もうとあちらこちらの土地を探していた。転勤も含め何回も引越した末、2007年に現在の住まいのある金沢市に定住した。

高山さんご夫婦が環境問題に興味を持つきっかけになったのは20年前に福井で開催されたイベントで比嘉照夫理事長の講演を聞いてからだ。この講演で比嘉理事長はEMによる生ゴミの堆肥化の講演を行い、自分でもそれを実践するようになった。また、同じ頃、地球村を主宰していた環境保護活動家の高木善之氏の講演を聞き、環境を破壊する自動車の排気ガス問題や冷蔵庫のフロンガス問題に興味を持った。講演後に講演会の主催者に電話をかけ、フロンガスの回収車を買って環境問題に貢献したいと申し出たほどだ。

その後、環境問題を勉強するうちに自給自足が大事だと考え、早期退職をして島根県浜田市近くの弥栄村に移住し6年間自給自足の生活を営んだ。現地の人に空き家を探してもらい、建物を見ないまま移住したほどだ。思い立ったらすぐに行動に移すのが高山さんご夫婦だ。

その後、かつて住んでいた金沢に戻り、現在の住まいを建てた。2018年1月に大阪で開催されたイベントで比嘉理事長のEMによる鳥獣対策の講演を聞いた。ちょうど自分の畑が鳥獣被害で困っていたところだったので、講演会終了後すぐにU-ネット事務局に電話をかけ、金沢近辺でEMの指導してくれ

る人を紹介してもらいたいと問い合わせた。そこで紹介されたのが石川県理事の泉崎富子さんだった。その後、泉崎さんから指導を受けて持ち前のチャレンジ精神を発揮し、短期間の内にEMを研究し様々なことに挑戦してみた。高山さんは更にEMの知識を深めるため、各地で開催された善循環の輪の集いに積極的に参加した。興味を持ったことに素直にアグレッシブに向かい合うため、EM技術の習得も早かった。

高山さんは最初15ℓタンクでEM活性液を培養していた。その後、良質な活性液が大切に大量に必要なため泉崎さんの紹介で百倍利器を入手。百倍利器を入手して家に運んだ時点で夜になったが、泉崎さんは帰ると言わず設置が終わる深夜まで付き合ってくれた(写真1)。泉崎さんが入会したばかりの自分たちの家まで来てくれて、実際に指導してくれるなんて思ってもみなかったが、これがEMの力なのだ高山さんは当時を思い出す。先輩(泉崎さん)が素晴らしいから私たち後輩がちゃんとEMを活用することができるかと語った。



▲写真1. 百倍利器の前に立つ高山さんと泉崎さん

高山さんご夫婦の自宅は、広い敷地の中心に芝庭と花壇があり、それを取り囲むように家屋、畑、果樹園がある。畑や果樹園にはそれぞれ結界が作っており、更にそれを取り囲むように敷地の



▲写真2. 高山さんの敷地平面図

周囲にも結界が作ってある(写真2)。ここはまるで結界の実験場のようだ。取材で訪れた日は快晴で、青空の下で空気がとても気持ちいい。

果樹園で栽培されているブルーベリーはヒヨドリが害が激しい。そのため栽培区画の周囲と中心に活性液のペットボトルで結界を作ったところ、その害はほとんどなくなった(写真3)。また、自宅北側では栗を栽培しているが、ここも猪の被害が大きかった。栗の栽培区画にも結界を作ったところ猪はまったく来なくなった。

綺麗に結界が作られた畑には、パプリカ、ズッキーニ、トマト、キュウリ、スイカ、モロヘイヤ、温州ミカン、カボチャ、ヤマイモ、マクワウリ、落花生、ゴーヤ、ツルムラサキ、キウイ、コンニャクイモなどが栽培されている。この畑は猪・ハクビシンの侵入に悩まされていたが、結界構築後は猪の侵入がなくなった(写真5)。

EMでスローライフを実践する高山さんの自宅見学が、以前雑誌社が企画する金沢のツアーコースで紹介された。また、これまで県内外から何人もの人が高山さんの畑や生活を見学に来ている。

「ここに引っ越してきたのはきっとEMが導いてくれたのだと思う。だからこんなに沢山の方と知り合えて、こんなに沢山の方に見学に来てもらえるようになった。」さわやかなご夫婦のさわやかな笑顔も、来訪者が感じる魅力の一つだ。

高山繁樹さんは10月20日(日)に開催される「善循環の輪 石川の集い in 白山」で「私のEM生活 自然と共生」を事例発表されます。高山さんご夫婦が実践するEM健康生活を、ぜひ、会場でお聞きください。



▲写真3. ブルーベリー栽培区画の結界



▲写真4. 敷地内にある畑



▲写真5. ペットボトルとブルーコーンで結界を作る



▲写真6. 果樹の剪定枝を無煙炭化器で炭化する

第10回「海の日」全国一斉EM団子EM活性液投入

～ 集計途中結果報告 ～

取材/大畑

全国の団体・個人が多数参加して行われた全国一斉EM投入。U-ネット事務局に寄せられている報告書の途中集計結果をご報告します。今年の海の日、比嘉照夫教授がイベントの一環として、名古屋市堀川での「夏の堀川浄化大作戦&釣り大会」に出席し、多くの参加した人たちと楽しく団子投げイベントを行いました。最終取りまとめ結果は次号に掲載する予定です。引き続き集計へのご協力をお願いします。

	団体・個人数	参加人数	EM団子(個)	EM活性液(L)
本年8月25日現在	138	3,461	138,313	436,942